

R E M E M B E R

リメンバー



バーバラ・T・ブラッドフォード

Barbara Taylor Bradford

尾島恵子＝訳

処理済

R E M E M B E R



リメンバー

ハーバラ・T・ブラッドフォード
Barbara Taylor Bradford

尾島恵子＝訳

Remember

by Barbara Taylor Bradford

Copyright © 1992 by Barbara Taylor Bradford.

Japanese translation rights arranged
with Morton L.Janklow Associates Inc.
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

リメンバー

1993年10月20日 初版第一刷発行

原作＝バーバラ・テイラー・ブラッドフォード

翻訳＝尾島恵子

発行者＝二見康生

発行所＝株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集03・3230・5693

業務03・3230・5333

販売03・3230・5739

印刷所 大日本印刷株式会社

1993 Printed in Japan

ISBN4-09-342601-5

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がございましたら、業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

リメン
バー

夫、ロバートへ、愛と尊敬をこめて

はるかな沈黙の地に去った私を
思い出して欲しい。

抱きしめ、

引き戻し、

未来を語り合えなくなっても

思い出して欲しい。

やがて記憶は薄れ、忘れる日が来ても

悲しまないで。

時の流れと暗闇が、

私が生きていた証を消したとしても

ほんのわずか忘れていただけだと

微笑んで欲しい。

私はいつでもあなたと共にいるのだから。

クリスチナ・ロゼッティ

第一章

ニッキーは闇の中で寝返りを打った。すでに疲労は限界を越えているはずだが目が冴えて眠れない。通りの音が、ホテルの中まで聞こえるはずがないのに、彼女は耳をそばだてた。さっきバルコニーから確かめた限りでは、北京の夜は不気味に静まり返っていた。

こうしているわけにはいかない。テレビレポーターのいるべき場所は現場なのだ。

カメラマンのジミーやサウンド・エンジニアのルーク、それにプロデューサーのアーチら、他のメンバーが気にかかる。海外取材中は特にチームワークが大事だ。今晚こうして彼女だけが休んでいるのには理由があった。

夕食の席で料理が運ばれるわずかの間に彼女は居眠りをした。アーチはしばらく黙って見守っていたが、軽く肩を叩いて起こした。

「2、3時間、休んでおいで」

「大丈夫です」

「これは上司として言ってるんだよ」

アメリカへの放送の準備がある、と彼女がためらうとアーチは、「そんな疲れた顔でかい？」と聞いた。

せつかく北京飯店のスイートにひとりきりになってもリラックスするどころか不吉な予感で胸がしめつけられそうだった。特派員としての経験や勘から、今夜あたり、中国人民軍と天安門てんあんもんに集合した学生の間で何か起きるのではないか。ニッキーはナイトテールに手をのばし、スタンドのスイッチをひねった。時計の針は10時2分前を差していた。彼女は意を決して毛布をはねのけ起き出すと、バルコニーからおそるおそる下の様子をうかがった。

北京飯店は永遠の平和通りとも呼ばれるチャンアン・アベニューに面している。その先が天安門広場だ。大通りは緑の街灯で照らされ、その下を大勢の人間が静かに進んでいるのが見えた。彼女が泊まっている14階から見ると、河を遡さかのぼるマスの大群のようだった。

ニッキーはとりあえず催涙ガスの匂いがないことを確かめると、安堵あんどのため息をついた。ゴビ砂漠から吹いてくる黄砂こうさも今晚は飛んでいないようだ。彼女はもう一度大通りの様子

を観察してから、室内に戻った。これが俗に言う嵐の前の静けさかもしれない。

部屋中の電気をつけると彼女はバスルームへ行き冷水で顔を濡らした。それから大急ぎで髪をとかした。柔らかなブロンドがほんの少し角ばったあごにかかって揺れた。大きな輝くブルーの瞳とふつくと官能的なバラ色の唇は彼女のトレードマークでもある。

視聴者からニッキーの愛称で呼ばれる彼女の本名はニコール・ウエルズ。28歳の若さながら、すでにベテランに負けない評判を得ている。世界のどこだろうと戦争や内紛がある、必ずニッキーの現地からのレポートがあった。危険を顧みない若い彼女の勇氣と行動力に人々は拍手を送った。世界一の女性戦場特派員、それがニッキーの目標だった。

アメリカン・テレビジョン・ネットワーク（ATN）でもニッキーに大きな期待を寄せている。銃弾が飛びかう戦場に立つだけでなく、さらに問題の核心を突き事態の進展の力を握る重要人物を捜し出してはインタビュする。他局とは違うアングル、それがニッキーの持ち味であり、ATNではバックアップのために最強のクルーを編成してくれていた。

ニッキーはブラシを置くと、手早くポニーテールにまとめた。メイクアップ・ポーチにいつも入っているピンクのリップをつけてから、彼女は改めて顔をしかめた。アーチに言

われるまでもなく疲労が顔に出ていた。本番の前に相当の厚化粧をする必要がありそうだと。5月20日、中国政府は戒厳令を布告し、放送衛星の使用を中止したばかりか、テレビカメラによる取材を全面禁止した。今後は天安門以外の場所で撮影したフィルムと電話による報告で、番組をつくらなければならない。

ベッドルームに戻って、彼女は脱いだばかりの服を再び身につけた。ベージュのコットンパンツにブルーのTシャツ、その上から半そでサファリジャケット。夏の海外取材の定番スタイルだ。ニッキーはいつも、デザインも色も同じサファリジャケットを3着持っていていくことにしていた。これにカメラ映りがいいコントラスト・カラーのTシャツとワイシャツがあれば、長期の取材でも変化をつけられる。足によくなじんだ茶色のローファアールをはいて身仕度は完了した。

つぎに、クロゼットから大型の旅行カバンを取り出し、デスクに広げた。防水加工した布製カバンをニッキーは「私の全財産」と冗談めかして呼んでいた。海外出張には必ず持っていていく頼もしいバッグだ。パスポート、記者証、クレジット・カード、イギリス・ポンド、USドル、中国の元、マンハッタンの自宅のキー、世界中の電話番号がびっしり書き込まれたアドレス帳、洗面用具とメイクアップ用品ひとそろい。外側の大きなポケットには街頭での取材に必要なテープレコーダー、移動電話、メモ帳、筆記用具、眼鏡、サング

ラス、それに催涙ガス用大型ガーゼマスク。ニッキーは、頼もしい取材の「仲間」があるべき場所にきちんと入っているのを確認した。

だが、今夜はこのバッグは部屋に置いていくつもりだった。彼女は茶色の小ぶりのショルダーバッグに必要最小限の品を移した。パスポート、記者証、移動電話、眼鏡、メモ帳、筆記用具、ガーゼのマスク、USドルと元、これだけあればとりあえず間に合うだろう。大型旅行カバンにカギをかけクロゼットに戻してから、ルームキーをポケットに入れスイートをとにした。ちらりと腕時計に目をやると10時20分になっていた。

本当は天安門に直行したかったが、彼女は一応ATNが取材ルームとして使用しているスイートをのぞいてみることにした。そろそろアーチがニューヨークに連絡を入れ、ATNの報道編集局長のラリー・アンダーソンと話をしているだろう。ちょうど13時間の時差なのであらは金曜の午前9時20分になる。

スイートは臨時のATN北京支局といった様相だ。小部屋からカメラマンのジミーの声が聞こえた。ニッキーは小さくノックした。ドアが開き、ジミーが笑いかけた。

「やあ、君か。すぐ終わるからね」と受話器を持ち上げてみせた。「アメリカに電話しているところ」

ニッキーは電話が終わるのを待った。

「ニッキーが来たんだ。さあ、お仕事の時間だ、ハニー」ジミーはおどけてから軽くキスして電話を切った。

「ジョアンが、よろしくって。それにしても中国の電話は性能がいいんだな。ニューヨーク市内でかけているみたいだ」

「交換システムはフランス製だと聞いているわ。奥さんお元気？」

「テレビでこっちの状況を見て、ものすごく心配している。悪いニュースばかり流れているんだろな」

ジミーは言葉を切り、ニッキーを見た。「さっきアーチに寝てこいつって言われたんじゃないの？ 今夜の放送にはまだ早すぎるよ」

「眠れないんですもの。なんだか胸騒ぎがして」

「いつもの第六感かい？」

思い詰めた口調にジミーは驚いて聞き返した。ニッキーと組むようになって5年半になるが、これまで彼女の直感が外れたことはない。まもなく52歳になる彼は、彼女が取材チームの一員であることを何よりの自慢にしていた。すでにテレビカメラマンとして数数の賞を受け、他の有名キヤスターからも依頼が来るが断り続けてきた。こうして、ニッキー

たちと飛び回っているほうがずっと性に合っている。もちろんニッキーの魅力もあったが、それは口に出さなかった。

「君が言うなら、準備しておこう。だけど、今晚は静かだよ。少なくとも20分前までは」ニッキーは目を細めて聞き返した。

「天安門広場でも？」

「いつものとおりさ。学生たちはテントから出てきておしゃべりしたり、合唱していた。正直言って、あのウツドストックを思い出したよ。昔はニューヨークも、夏の夕方はのんびりしてたんだ」

ジミーはことさらに気にしていない風を装った。疲労しているニッキーをいたずらに刺激したくなかったからだ。が、生まれつきのんびりした性格ということもあった。この落ち着きが緊急事態で幾度も役^{どうしょうへい}に立っている。

「だけど、いつまで鄧小平^{とうしょうへい}が放置しておくかしら。相当いらいらしていると思うわ」ニッキーは自分なりの分析を述べた。

「あの男ならやりかねないと思うの。この数日間人民軍は不穏な動きを見せているし。このまま無事にすむとは考えられないけど」

「君は極端すぎるよ」

ジミーはたしなめた。

「いいえ、流血の惨事がきつと起きる…」

「そんなことしたら、世界中の鼻つまみ者になるだけだ」

「問題はそこよ。彼は今や権力の亡者だわ。地位を守るためには、なんだってやりかねない」

彼はしぶしぶうなずいた。

「あの学生たちはどうなるの。若く、理想に燃えて、中国を良くしたい一心なのに」

ニッキーは声をひそめた。「あなたも知っているでしょ、鄧小平が学生から旧悪と呼ばれているのを。84歳の彼に若い世代の気持ちを理解しろというのが無理なんでしょうけれど」

「ああ。民主化要求はいちばん聞きたくないだろう」

「軍隊を使うでしょう」

「これからどうする？」

「現場で、1989年6月2日の北京で起こることを世界に伝えるわ」

ジミーは軽くせき払いた。

「街頭でのテレビ取材は許されていないんだ。ホテルのロビーを出たところでカメラを壊され、僕たち全員、取り調べのあと、刑務所送りにならないとも限らない」

「刑務所にだれが行くんだね」

いつの間にかプロデューサーのアーチ・レバーソンが後ろに立っていた。部屋で休んでいるはずのニッキーがなぜいるのか、聞くなり座っている彼女の肩に手をかけた。

「当局の許可が出ていないからですよ」

ジミーはプロデューサーに説明した。

「状況は昨日と変わっていないんだ、ニッキー」

アーチは置いた手に力を込め、なだめた。長身の彼は仕事柄いつも身なりには人一倍気を使っていた。41歳なのに頭はほとんど白く、シルバーの眼鏡の奥で光るライトブルーの瞳がいかに切れ者という印象を与えている。

3年前他局からA T Nにスカウトされたとき、彼がつけた唯一の条件は、ニッキーのプロデューサーなら、ということだった。すでにテレビ界の名誉であるエミー賞を何度も受賞し、若手キヤスターでは最も将来を期待されている彼女とチームを組むのは、プロデューサーの誇りである。ふたりは不思議に顔を合わせたときから波長が合った。ニッキーは信頼の眼差しで見上げた。

「ジミーの話では夕方までは平和そのものだったというんだけど、衝突が起きそうな気がするわ」

「君の勘はよく当たるからな。僕も恐らくこのままでは収まらないと見ている」

「アーチ、最新ニュースは？」

「さっきロビーでCNNの連中から、妙な噂が流れているって聞いた」

ジミーが立ち上がった。

「天安門広場がだめなら、今週初めにやったように北京市のはずれで撮影したらどうかな」
「いやそれは危険だ」とアーチ。

ニッキーはきつとなって言い返した。

「なぜ？ 移動電話でそこそ実況中継するなんていやだわ」

「プロデューサーとして君を危ない目に遭わせたくない。これはチーム全体の問題だ」

「そんなことだとCNNに負けてしまうわよ」

ふくれるニッキーを見てアーチは苦笑いした。この負けん気と向こうみずなところを彼はいつも高く評価していた。最近では彼女を制するのが自分の務めなのでは、とさえ考えることがあった。

ジミーがぼんと膝ひざを打った。

「名案がある。ホテルのバルコニーで天安門の遠景を入れて撮ろう」

「素敵！ まだ国際宅配便は使える？」